正体不明の人形師の人形

璃慧紗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正体不明の人形師の人形

【Nコード】

N8769R

【作者名】

璃慧紗

【あらすじ】

人形師と呼ばれる者達が存在していた。その名のとおり、人形を作ることに長けた者達で、その頂点に立つ者は国一つ、下手をすれば数個の国の価値と力があると言われていた。

これは、とある人形師を主に持った、とある人形の物語。

目覚め・前（前書き）

初めまして、私の他の小説も読んでくださっている方、こんにちは。

読んでくださりありがとうございます。

目覚め・前

「おはよう、今日は良い天気だ。」

主の声に私も心の中でおはようございます、と返す。

「昨日は雨だったからな。お前が湿気で壊れることもない。工房の奴等もだ。」

声は心なしか弾んでいようだった。顔を見ることはできないが、きっと笑っているのだろう。

「さて、工房にいる奴等を仕上げないとな。店番を頼んだぞ？」

任せてください、主。私はまた心の中でそう言った。

体が浮くのを感じた。男の人としてはさほど大きくないが、力を感じさせる腕は、紛れも無い主の腕だ。

トントン、と階段を降りる音が聞こえ、それにあわせて体が揺れる。揺れが収まると、椅子に座らされた。

そのまま主は私から離れていった。ギィ、と扉の軋んだ音が聞こえた。工房に入ったのだ。

主の気配がないのはさびしい。だが、仕方が無い。今回は二件の依頼が入ったのだから。

さて、私は先ほどから目が見えない、喋れないと状況だが、決して病気とかそんなものではない。私は「人形^{ドール}」なのだ。

人形師、という者達がいる。この者達は人形を作ることに長けた者達で、私ももちろん人形師に作られた。始まりは、とある石からだ。

とある国、その国は鉱山が多くあった。金や宝石が数多く出てきており、珍しい鉱石も多かった。鉱山には、鉱夫と鉱石を調べたがる学者で溢れていた。

だが、その鉱山にも終わりが見えてきた。採掘のしすぎで、取れる物が少なくなってきたのだ。

国の者達は職業を変えることを余儀なくされ、とうとう何も取れないと分かると、鉱山には誰も寄り付かなくなった。

そんな中、一人の学者が残った。きつとまだなにかあるはずだと鉱山で一人調べ始めたのだ。多くの学者は笑った。「そんなのは無駄なことだ」と。

だが、それは残った学者の発見で大きく変わる事となる。

ドルストーン
人形石の発見だ。最初は、それを見つけた学者自身も何かは分らなかった。だが、鉱山の近くの村である子供が何気なく手に取ったときこう言ったのだ。「心臓の音が聞こえる。」

それに驚いた学者は、その子供を連れて自分の研究所に帰った。そして分かったことは、その音が聞こえるのは二人。少年と、裁縫師の男。

そして、もしこの石が心臓ならば・・・という考えの元、出来上がったのが『ドル人形』なのだ。

その裁縫師の男が最初の人形師と言われている。その後、人形師は増え、この大陸にある五つの国に散らばっているのだ。

さて、人形の基礎知識は覚えていることが確認できた。しかし店番ってこういうことかというのか今でも分からない。主は何も言うてこないが。私もなにかいえる状態ではないが。

目覚めの時が、待ち遠しい・・・。

目覚め・前（後書き）

足りないところは後編で明かされる予定なので続けて読んで頂きたいです。

目覚め・後（前書き）

読んでくださりありがとうございます。

目覚め・後

どのくらい時間が経っただろうか。主はあれから何度か顔を出したが、今もまた工房に籠っている。

何度目かの時に、「暗くなってきたな。」といていたから、きつと夜というのがきたのだろう。

はやく見てみたいものだ。

さて、また知識の復習をしようか。お客は一人も来ない。問題はないだろう。どのみち、私の声は聞こえないのだから。

私が『人形』であることはすでに復習済みだ。では、もっと詳しく考えよう。そうだ、自己紹介の仕方は考えた方がいいのだろうか。挨拶のしかたも聞いたことがあるから分かるが、一応自分のことを復習しておくのも悪くはないはずだ。

私は、作られてからずっと意識があるのに眠っている状態を続けている。人形石ドールストーンによって作られた『人形』はその心音が聞こえる者をパートナーにもつ。心音が聞こえる「石との波長が合っている」ということなのだ。この波長は何なのか分かっていないが、波長が合っているほど、人形がよく動くのは分かっている。

ちなみに、私が主と言っているのは、私の意志で、強制されたわけではない。

ともかく、作られた『人形』はパートナーとの波長をより合わせるために、調整をするのだ。

これを、＜調整期間＞と呼ぶ。私の状態がこれにあたる。

月日がたつにつれて調整が終わった場所は使えるようになる。私
はかなり上手く作られた作品なので、意識の確立、聴覚、嗅覚など
は終わるのが早かった。しかし、主の仕事柄、波長が合うのがひど
くゆったりとしている。この期間はかなり長いのもそのためだ。

そして、この間、正確な時は分からないが、触覚の調整が終わっ
たことが分かった。これは体内の期間殆どが終わったことを現す証
拠で、私は嬉しくてたまらない。

もうすぐ、もうすぐ終わる……。

その感覚がまた湧き上がってきた。あと残っているのは視覚と声
帯。調整の最終段階だ。

……おっと。つい、いろいろなことを考えてしまった。……
自己紹介は、よく考えるとしよう。

と、いきなり眠気が襲ってきた。

- 調整最終段階移行ため、意識を落とします -

そんな声が聞こえてきた。これは、無意識下で出している声だ。

意識が沈むとき、店の扉が開いたような気がした。

「いっしょにどっつするんだ？」

「もちろん、売るんだよ。気付かれないうちにな。」

- 意識の浮上を確認 -

- 調整完了まで、あと60秒 -

声が聞こえてくる。まだ目は見えない。だが、あと少しだ。あと少しで、主と対面の時がやってくる。

「ほら、いっしょを運ぶぞ。」

「ああ。よっ……と。」

- 50秒 -

体のゆれを感じた。これは運ばれているのだろうか。感触が固いから、何かに入れられているらしい。

それにしても、先ほどから主の声が聞こえない。長い間、聞いてきたあの声が。

- 40秒 -

「それにしても幸運だったな。あんな古ぼけたところに『人形』があるなんて。」

「そうだな。誰もいないところにこいつがいたんだ。持ってってくれっていつてるみたいじゃねえか。しかも防犯のためのものはないしな。」

笑い声。

「まあ、馴れた俺達にあってもなくても関係ないけどな、そんなもの！」

- 30秒 -

「そういえば、どこに向かっているんだ？いや、方向から闇市だと分かるんだがよ……。」

「言っでなかったか？知り合いが店やってるんだ。そこで買い取ってもらうんだよ。まあ、あんなところにおいてある『人形』だから、たいしたことはないだろうがな。金にはなるだろう。」

「それを期待してるよ。失敗作かも知れないがな。」

失敗作？

- 20秒 -

「まあ、どんなやつが作っでいようと『人形』であることには変わりないしな。人形石なしの偽者だろうと、この見た目なら売れるだろう。」

偽者？

「違うない！ははは……！」

- 10秒 -

推測するにこの二人は私を主から引き離れた者達だと分かった。
そして私を売ろうとしていることも。

冷静にならなければ。主に教えられてきたはずだ。こついうとき
は

- 状況判断。声から男二人だと断定。 -

- 5 -

- 対処パターン参照 -

- 4 -

- 身体の状態を確認。問題なし。 -

- 3 -

- 2 -

- 1 -

ゆっくりと目を開ける。光がなく、何も見えない。体を動かすこともできない。初めて動かす手で壁に触れる。ざらざらとした感触。この感触は覚えている。どうやら私は狭い木箱に入られているようだ。分かった途端、怒りがわいた。よりもよって、あの方の作品を木箱になど！！傷がついたら主が悲しむだろうが！！

私は、まだうごく余裕がある足で、壁を蹴破ろうとした。

ガンッ！！

「なんだ？！まさか、目覚めたのかっ？！」

男達の慌てた声が聞こえてくる。私はそれにかまわず、蹴り続けた。思ったより木箱は丈夫らしく、なかなかこわれない。

「い、急げ！はやく！」

「お、おうー！」

箱がまた揺れる。なんと迷惑な。ともかく、ここをでなければ、主に会うことはできない。

「此処だ！」

動きが止まる。どうやら、男達の目的地に着いたらしい。

「どうした？その中に入ってるのは・・・もしかすると、『人形』か？」

「そつだ！どうやら、持って来る途中で目が覚めたらしい。引き取ってくれ！」

「まだ力が弱いから問題はないはずだ！」

「それは・・・」

目覚めたばかりだから力が弱い。それは一般的な『人形』の場合だ。私は特別製。常識では語れないところもあるのだ。

バキィツ・・・

ようやく木箱が割れた。幸い地面に下ろされていたので、落ちる心配はなかった。

「あの木箱が・・・」

立ち上がり、声が出たほうに体を向ける。いるのは私を売ろうとしたものと売られようとしていたものだ。

「ひいひい・・・！」

店主は走って姿を消してしまった。だが、誘拐犯の男二人は地面に座り込んだままとまっている。

私はその姿をみてかなり悔しかった。目覚めて最初に見るのは主と決めていたのに。けれども実際に見たのは男達と暗い空と暗い道。なきたくなってきた。

「た、助けてくれ・・・！」

片方の男がそんなことを言ったが、私は無視した。すでに対処パターンの中のなかの処罰・処刑編は除外している。このような者達のために主の『人形』である私が手を汚す必要はない。

さつさとこのふたりに主のところへ案内させよう。そのほうが心音を探してかえるより早く帰れるはずだ。パートナー同士は離れていても、互いの心音を感じ取ることができる。しかし、感じ取れても具体的な場所は分からないので、案内させたほうが時間が掛からないのだ。

だが、事はそう簡単に運ばないようだった。

「ほう。人形か。」

現れたのは、いかにも貴族といえる格好をした男。

私のことを、値踏みするかのような目つきでみているように思えた。

「よし。その二人。」

「へ・・・？は、はい。」

「なんででしょうか？」

男はやはり貴族だと名乗った。主の言っていたことはただしかったようだ。さすが主、目の見えない私に実際みてわかるように説明

してくれていた。

男二人は平伏している。

「　　ということで、私がこの人形を貰おう。分かったね？」

「はい……。」

なにがということ、なにかわからない。おそらく、『人形』収集家なのだろう。平民に金をだすのは嫌だから闇市とかいうところにいることを見逃す代わりにタダでよこせ、と。

「では、こちらにきなさい、『人形』。」

私は動かなかった。貴族の男が眉を動かした。

「聞こえなかったのか？来いといっているのだが？」

返事をするのも嫌だった。一番に主を見られなかったのだ、最初に返事をするのを主をしても問題ないはずだ。

だが、貴族には問題があるようだった。

「言う事を聞かないか。ならば仕方ない。おい、お前ら、捕まえろ。」

その声と同時に物陰から人が5人ほど現れる。知識にある骨格のつくりから男達だと分かった。

対処するべきだろう。私は向こうの出方を見た。だが、向こうはなかなか動かない。私が『人形』だからだろう。『人形』は、人以上の力と技能を持つ。それは戦いに特化しているものが多く、『人形』一体と人間10人が戦ったら間違いなく人形が勝つ。

「なにをしている！早く捕まえなさいか！」

男が叫ぶ。漸く、男達が動こうとした。が、その時ひびく音が聞こえてきた。

「警備隊隊長、ロイドだ。誘拐された『人形』を保護するために来た。」

「警備隊……！」

貴族が顔色を変える。私を襲おうとした男達もだ。

「『人形』は……ああ、そいつだな？」

ロイドと名乗った彼は私の方を見て、聞いていた。私はただ頷く。

「よし。では、貴族様？現行犯でよろしいですか？」

「……ああ……」

それはつめき声にも取れたが、ロイドは了承と取ったらしい。

瞬間に、貴族は警備隊に連れられていった。

私はそれを見ていた。と、ロイドと名乗った男が近づいてきて私の前にしゃがんだ。

「さて、と。『人形』、お前のパートナーが」

「ロラン!」

声が重なった。その片方は、聞き覚えのある声だった。

「主!」

私は近づいてきた人物に思いつきり抱きついた。

「……大丈夫だったか? 怪我は?」

「問題ないです。」

「……お前ら?」

仲間はずれにされていたロイドさんが声を掛けてきた。そこで思い至り、ロイドさんに向き直る。

「いろいろありがとうございます。」

私がそう言うとロイドさんは頭を掻いた。

「いや・・・アイン、お前とは大違いだな！」

「失礼な・・・俺だって礼くらい言っさ。助かったよ、ロイド。」

「じゃあ酒でもおごれ！」

「やっぱりな！俺は未成年だから無理だ。」

主とロイドさんがいいあらそっていていた。けれども、二人の顔には笑顔がうかんでいて、仲がいいことが分かる。

「楽しそうですね、主。」

「まあな。俺のことは名前でもいいぞ。ああ、それから・・・」

と、なにか主が言いかけたところでロイドさんが声をかけてきた。

「こんなところに長居する必要はない。送ってくぞ。馬にはのれるな、アイン？」

「ああ。乗れる。帰ってから話そうか。」

そして、私は主と馬に乗せられ、家に帰ることとなった。

目覚め・後（後書き）

誤字・脱字がありましたらお知らせください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8769r/>

正体不明の人形師の人形

2011年10月1日13時30分発行